

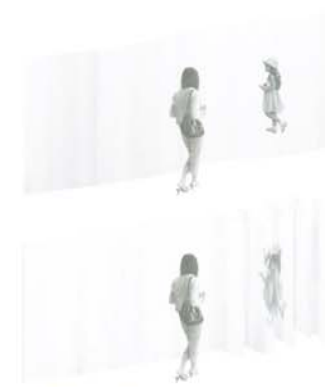


うつろう境界

都市の中心を成す教育施設を開け閉めできるカーテンのようなガラス質で新たに包み込み、緩やかな境界線をつくる。日中、子ども達の安全を守るためにその境界線はフェンスや門で固く閉じられており、周辺の道路はひどく冷たい景色を作りだしている。どのような教育が行われているのか、どのようなことが敷地内で起きているかさえもわからない状態では、市民と児童との距離は極めて遠く、かえって危険である。義務教育機関を卒業した市民にとって教育機関は硬く閉ざされた都市の空虚として存在している。

そこで、その境界線をガラスファイバーで編み込まれたカーテンのように編み込まれたガラス質で新たに包み込み、柔らかく温かみのある教育施設をつくる。日中、児童達が学校やグラウンドを利用するときにはそれは閉じられる。ピンと張れば板ガラスのように透明性を持ち、少したわませればそこに光を溜め込み不透明性を持つこともできるといったように、必要に応じて開け閉めすることで境界線の不透明度を調整することができる。そして、放課後にはガラスカーテンを開き一箇所を巻くことで東屋のような空間を創り出す。都市に開き市民を招き入れることでグラウンドを公園のように使用でき、コミュニケーションが生まれ社会的教育がなされるのである。放課後という時間を都市の中で多様な人々と共に過ごすことで子ども達は見守られる。

新たにガラス質で構成された教育施設を建設するのではなく、ガラス質のカーテンを使用することで既存教育機関の敷地内で“義務教育”と“社会教育”のオーバーラップを創出する。



境界線の見通しの有無
ガラスファイバーをカーテンのように編み込むことで創られた柔らかな境界。閉じられた学校の輪郭を透過させるだけでなく、たわむことによって屈折と反射を繰り返し様々な移ろいを検し出す。見通しが可能な境界と見通し不可能な境界を生み出す。

開け閉め可能な境界線

境界線を開け閉めすることで柔軟な都市空間を創出することができる。閉じた時には、囲まれる事で街に対して開放的でありつつも不可侵な領域をつくり、また開いたときには学校として使用されていた場が、誰もが入れる社会教育の場と変わる。巻かれることで出来た空間は、周りに見えることで安全性を持つ新たな教育空間となる。

